

和歌山大学 観光学部

Wakayama University



和歌山大学観光学部は国立大学唯一の観光学部として、これからの観光をリードする国際的、学際的視点を持った観光人材の育成と、観光教育研究における日本、アジアの拠点となることを目指している。学部の特徴などについて大浦由美学部長に話を聞いた。



観光学部長 大浦 由美

おおうら・ゆみ／1993年信州大学大学院農学研究科林学専攻修了。名古屋大学大学院生命農学研究科助手などを経て、現在は和歌山大学観光学部教授。専門は森林経済学、観光学。森林空間の観光利用の研究などを行っている。

基本課題と捉え、「観光文化」「観光経営」「地域再生」の3コースを設けて「持続可能な観光のあり方」を探っていきます。

国際的な視野と課題解決力を培う実践型教育プログラム

本学部の特色として、国際性と学際性を重視したカリキュラムに基づく充実した実践型教育プログラムが挙げられます。グローバルに学ぶ「Global Program (以下G.P.)」と海外研修(Global Intensive Project以下G.I.P.)、ローカルに学ぶ地域連携プログラム(Local Partnership Program以下L.P.P.)の2つです。

G.P.は観光学を「英語で」学び、国際的視野を培うプログラム。エントリリーには入学後の語学検定試験のスコアなど一定の条件が求められますが、国際的視点で物事を



GIP(上:カナダ/下:オーストラリア)

捉え考える力、多様な文化的背景を持つ人々と互いに理解し合えるコミュニケーション力を養います。1、2年次には語学力、アカデミックスキルなど、専門性を深めるために必要な基礎を学びます。2年次後半から専門科目を履修し、観光学の専門知識を修得。最終的には自らの考えを高度な英語力で発信できる能力の習得が理想です。英語で卒論を仕上げたり、国内外の大学院へ進学したりする学生も少しずつ増えています。

一方、G.I.P.では、英語力強化のための語学研修、調査研究を伴う研修、国際的な観光機関と連携した活動など、様々な海外研修プログラムを用意しています。

2つめのL.P.P.は、学生の関心や問題意識に基づき、地域づくりや観光振興に関する活動に参加することで、地域課題の発見や新たな魅力創出に取り組みながら地域活性化の方法を提案する能力を養います。これまでに203件のプログラムを実施し、今年度は16件の活動を行っています。

こうした取り組みを通じて、学生たちは地域の人たちの熱い思いに刺激を受け、時に失敗しながらも自分で課題を解決するための行動を起こせるようになり、状況に応じた適切な判断ができる実践知を身につけていきます。そんなふうに成長していく姿を見ると、と

地域再生に貢献し、観光のプロフェッショナル育成、輩出が使命

2023年度の就職率は98.3%(就職者数117名/就職希望者数119名)で、卒業生は観光関連産業をはじめ、不動産業、金融業、卸売や小売業など様々な分野に就職しています。観光に関連する分野は多岐にわたり、本学部で習得した専門知識や実践力が職種を超えて活かされていると感じます。

コロナ禍を経て、持続可能な観光のあり方など観光が根本から問い直されているいま、地方の課題を解決して地域再生に貢献することや、大学院教育を通じてより高度なプロフェッショナル、指導的立場の人材を育成して世に送り出していくことは本学部／研究科の社会的使命だと考えています。本学部が用意する多彩な教育プログラムを積極的に活用して、よりよい観光の未来をともに切り拓いていきましょう。



LPP(上:湯浅町/下:有田市)

PICK-UP

持続可能な観光戦略を推進する与論町との協力関係



SDGsを目指す与論島の美しいビーチ

こうした与論町の取り組みは、地域社会に新たな活力をもたらしています。実際の観光再生の現場に観光学部も協力し、未来に向けた持続可能な観光地としての一步を着実に踏み出しています。

鹿児島県与論町は、1970年代に日本最南端のリゾート地として観光ブームを迎えましたが、沖縄返還後は観光客が沖縄本島に流れ、観光業が大幅に減少しました。住民の生活と観光業の関係、そしてブーム終了後の空白がもたらす被害を反省し、与論町は持続可能な観光を目指すことになりました。その一環として、与論町は和歌山大学観光学部と連携協定を結び、教育、研究での様々な協働活動を展開しています。具体的には、持続可能な観光を専門とする加藤久美教授と共に地域の保全を優先した観光を追求する取り組みや、日本国際観光映像祭を主催する木川剛志教授と共に観光映像を制作しています。学生たちもフィールドワークを通じて、島の地域資源を活かした取り組みから多くを学んでいます。

Hot Topics

観光地域を支える専門人材育成:専門職大学院の設置



熊野古道を歩く地域実習風景

2年次には各地のDMOに派遣され、地域の具体的な課題解決に取り組めます。このようにして、理論と実践を兼ね備えた「観光地域共創人材」を育成しています。

観光を通じた地域の持続的発展が課題となるなかで、全国各地で日本版DMO(観光地域づくり法人)の設立が進んでいます。DMOは観光地域づくりの司令塔として、多様な関係者と協働し、戦略を策定・実施する法人です。そのため、観光に関する広範な知識を持つ専門人材の確保が不可欠ですが、現実には深刻な人材不足に直面しています。

重要なホスピタリティについての学びを得ました。

現在は「エクセレントホスピタリティ」の追求を経営理念のひとつに掲げる会社の営業部門で課長補佐を務めています。会員制ホテルの会員権販売が主な業務です。お客様に喜んで頂けるホテルサービスを提供し、顧客満足度向上に努め、新規顧客や既存顧客への営業活動に繋がっています。

山田マミさん
(2016年度卒業)
リゾートトラスト株式会社営業職

学部では観光地経営などを学びました。また、フィールドワークの一環として観光資源の発掘を地域の方々と共に行うなかで、より人々に求められる観光地の創造にとって

西込千穂さん
(2019年度卒)
国際観光振興機構(日本政府観光局)

学部ではコミュニティペースドツーリズムについて学び、現在は日本政府観光局でインバウンド観光を促進する仕事をしています。学生時代に国内外のフィールドワーク

行うワンストップの旅行会社を運営しています。

再現が難しいまちづくりの手法や考え方を、授業やゼミでの理論とフィールドワークでの地域のリアルの両面で学べたことが今の仕事に繋がっています。多くの人にとって観光は「すること」ですが、「提供する側」の目線に立ち、マネジメントやデザインなど幅広く学ぶことができました。

卒業後は地域に関わる仕事に就きたいと思い、住宅メーカー、観光コンサルティング会社を経て、現職に就きました。現在は隠岐島で国立公園の自然保護や情報発信、自然ふれあいイベントの企画などに携わっています。観光学部での学びを通して、「地域文化を理解し、利活用することで守られる自然がある」という思いで取り組んでいます。

炭田晃希さん
(2012年度卒業)
北海道標茶町観光協会(地域おこし協力隊)、北海道観光デザイン代表

卒業後は大阪で製造業に就職しましたが、現在は観光協会として地域の情報発信をしながら、個人事業として、ひがし北海道ならではのツアーを企画・販売し、ガイドまで

高竹瑞恵さん
(2017年度卒)
環境省大山隠岐国立公園隠岐管理官事務所、自然保護官補佐/アクティブレジャー

「観光」は多岐に渡る業界と連携できること、そして自然環境や地域文化を後世に遺すため、サステナブルな視点で考えるべき分野であることを4年間で学びました。

COLUMN

観光学の使命:持続可能な地域づくりへの貢献



本学部は、持続可能な観光のあり方を研究教育の基盤に置いています。現在、訪日外国人観光客の急増により都市部ではオーバーツーリズム問題が再燃し、観光の意義が問われている一方で、地方部においては人口減少による地域経済の縮小が懸念されており、観光振興を通じた交流人口や関係人口の拡大や経済の活性化が求められています。

私たちは、多様な学問分野を横断する総合性・学際性を特徴とする観光学を通じて、持続可能で責任ある観光を推進し、地域社会の発展に貢献する人材の育成を目指しています。

